



釧路公立大学公開講座 30年の歩み



公開講座の歴史と 開催活動の概要

公開講座は「地域に結びつき開かれた大学」の理念を具現化する企画で、平成2年(1990年)9月に始まりました。本学における公開講座の開催だけでなく、地域の会場においても講座が開催されております。本学の近隣の市民の皆さま、そして釧路管内における町村の住民の皆さまにも講座に参加していただくことで、本学の教員の研究成果を聴いていただける場が公開講座でございまして、これまで計30回開催されてきました。

こうして市民・町村の住民の皆さまの参加によって続いた公開講座の開催には、本学の企画委員会の教員と事務担当が準備しまして、講演者は本学に所属する教員の中から4人を選出しております。4人の講演者は本学での講演の後日、2つのグループに分担して釧路管内2町村の会場において講演しております。開催年によって公開講座は、大学近隣の町村はもとより大学からの北や東の方角に約80キロ離れた町においても講演しております。

企画委員会では、引き続き本学の公開講座が知の源泉の場となるように、今後も開催に向けた努力を続けて参りますので、市民・町村の住民の皆さまの御参加と市町村の自治体の御協力を賜りますようお願いいたします。

令和2年(2020年)12月 企画委員会一同

公開講座は、新型コロナの影響で今年度は中止となりました。30年という節目を、それなりに盛大に飾ることが出来なかったのは、残念と言うほかありません。

私の31年間の本学での勤務で、講師を務めたのは3回、10年に1度担当した格好です。初回は、日本的経営のこれからを論じたものではなかったかと記憶していますが、労働基準監督官の方と労働法が専門の鎌田先生から質問を受けたことだけはハッキリ記憶しています。2回目は、企業統治の課題を取り上げたものでしたが、これも会計学が専門の濱田先生から質問を頂いたことを記憶しています。3回目は、昨年度で北陸都市探訪という、かなりくだけたテーマで写真を沢山活用して話をしたのですが、これもご専門が地域研究か、これに類する研究をされている教育大の先生から質問を受けただけでした。皆、専門家からの質問で終わっているので、一般向けとしては、どれも成功しなかったのではないかと、反省をしているところです。

私の講座に限らず、町村会場にいくと殆ど質問はないということなので、公開講座がどれだけ、市民の皆さんに関心を持って頂いているか反省するところがありますが、地域の実情に合った論題を継続して提供するのは、教員の数からしても、なかなか大変なことです。これはずっと分かっていたことですが、改善策が打ち出せない問題でした。今期の企画委員会の委員には、意欲的な方を配置することができましたので、何らかの打開策を構想してくれるのではないかと、内心期待しているところなのです。

釧路公立大学学長
小路行彦

公開講座三十年目を迎えて



30th Anniversary 座談会

「私と公開講座」

令和2年(2020年)9月18日(金) 第一会議室(大会議室)

出席者

釧路公立大学教授
(司会進行)

皆月 昭則

釧路公立大学
学長

小路 行彦

釧路公立大学
准教授

三輪 加奈

会社員

色木 繁さん

主婦

中村 礼子さん



司会進行

皆月 釧路公立大学の公開講座30周年を記念しまして、座談会を開催いたします。司会進行を務めさせていただきます。本学企画委員会委員長の皆月と申します。はじめに、座談会にご出席の皆さまに自己紹介をしていただきます。

小路 公開講座では、これまで3回ほど講師を務めてきました。一度企画委員会の委員として、公開講座のコーディネートをやったこともあります。私は一度も他の先生の講座を聴いたことがないので、市民の皆さまがどのような受け止め方をするのかを今日お伺いし、これからに活かしていきたいと思っております。



3回は講師を務めました

三輪 釧路に来て11年目です。公開講座は数年前に一度だけやらせていただきました。当時の私よりもご年配で社会経験も高く、いろいろな知識を持っている方々の前で講演するのは、とても緊張した記憶があります。



緊張しました

企画委員会に所属して3年目になります。今後の公開講座をどうしていくのか、どのようなテーマが求められているのか、お聞かせいただければと思います。

色木 コンピューターの会社でプログラム等を作っています。釧路生まれで釧路から離れたことがなく、50年間釧路に住んでいます。高校を卒業して社会人になったので、なかなか大学へ足を運ぶことはありませんでした。公開講座というものが、われわれ市民とのひとつの接点として機能していると感じています。



公開講座はわれわれ市民との接点

中村 近所に住む一主婦として、経済学部とはどんなことを教えているのか興味がありました。公開講座では、自分の進んできた道とは違う研究をされている先生たちの話を聞くのが楽しみでした。若い人たちがどのような講義を聴いているのか興味を持ち、楽しんでいます。



いろいろな話を聴いてみたい

自分では何を聴きたいというより、いろいろな話を聴いてみようという気持ちがあるから、「これはどのような話なのか」と興味を持ちながら聴いていました。

皆月 公開講座の30年の歴史の中で、私も2回の講師を担当しました。その都度、公開講座を担当した者として経験談をお話しさせていただきます。

公開講座は知の源泉の場

皆月 公開講座が開始されてから30年になります。本学の公開講座が引き続き知の源泉の場として、次の30年も続いていくためのご意見を賜りますようお願いいたします。

質問に入る前に私からお話します。ピーター・ドラッカーの著書『ネクスト・ソサエティ』と『テクノロジストの条件』という本を、最近、読み直しました。『ネクスト・ソサエティ』は2002年刊行で、副題は「歴史が見たことのない未来がはじまる」です。この本の冒頭では「日本にとっての最大の問題は経済ではなく、社会のほうである」と、社会と経済の行く末をドラッカーの鋭い視点で問い、来るべき未来を予測し、その時点で生じる問題や脅威、機会を明らかに述べています。

『テクノロジストの条件』は2005年刊行で、副題は「ものづくりが文明をつくる」です。この本には、技術が文明に果たしてきた役割とその可能性、イノベーションの方法論が述べられています。まさにコロナ禍の今、状況に出現しようとしている新しい世界経済の秩序と技術の関係性について述べていると思われました。

公開講座のように、大学が社会に関わっていくヒントとして、ドラッカーの一説を引用して紹介します。「知識の世界は流動してやまない。今日の学部、学科、科目はまもなく意味を失う。(中略)現代社会は、みずからの知識の基盤として理系、文系両方の人を必要とする。特に理系のこととわかる文系の人を必要とする。専門分野や方法論しかわからない人ではなく、知識を仕事に適用できる人を必要とする。新しい知識を生み出す人だけでなく、新しい知識を日常の活動に適用できる人を必要とする(第14章「知識の意味を問う」より)」。これらの本には、ポストコロナ社会の時代の転換をとらえているヒントが書かれており、まさに大学と社会のコネクションになる本学の公開講座は、知識の基盤をつくるきっかけになってきたと思います。

新しい知識を得て、その基盤でさらに新しい知識を生成し、日常の活動に適用できる人のために

皆月 私どもは大学に所属しており、学問や研究をしているからといって、決して傲慢な意識はありません。公開講座をはじめ日々の大学での講義は、聴く人々に対して、知識の基盤をつくるきっかけの機会、情報提供の場に

たい、そこから皆さま自身で新たな知識を生成してほしいと願っております。学問や大学の研究に対して、市民の皆さまの持っている印象について述べていただきたいと思っております。

色木 大学の講義は難しいと最初から思っていて、公開講座で同じことをやられてもおそらくついていけず、自分には関係ない世界の話だと思ってしまっていたところでした。社会に入ってから学び続けなければならないと考えたときに、講座を聴いてその敷居をまたぎ、面白いと思えたその時から学びが始まると思えました。大学の講義は難しいですが、市民向けにアレンジしていただいている。われわれの頭にスッと入ってくるようであれば、続くのではないかと思います。工夫されているでしょうし、あまりこちらも身構えてはいけなないのではないのでしょうか。

中村 私は「こういうことを学生さんは勉強しているのだな」と興味を持つことを大事にしているので、難しい話でもそれほど苦痛だとか、聴きたくないなどはありませんでした。自分が知らなかったことや、違う地域の文化や言葉などが面白く、全部含めて楽しく思っています。



大学の講義や研究内容をわかりやすく住民向けにアレンジする公開講座

皆月 小路先生は公開講座開始から約30年間大学にいらっしゃいますが、ご自身の講演テーマでアレンジしていることや、聴講の人々が興味を持てるような工夫など、留意されたことは何でしょうか。

小路 私が1回目の公開講座を担当したのは、赴任して5年目でした。直前に子供が生まれたものですから、家内の実家に車を飛ばして子供の顔を見て帰ってきて、講演をやったという懐かしい思い出があります。その時のテーマは「雇用制度の明日を探る」という題名だったと思います。当時、日経連から「新時代の日本的経営」という重要な提言がありました。今日の日本の労働の在り方を大きく規定していくような、ターニングポイントになる文書で、それにコメントをする形で話をしたと記憶しています。内容的には社会的にも関心のあるテーマでしたが、市民向けとしてはどうだったか、工夫も十分だったのかという反省も無きにしもあらずでした。2回目は「ガバナンスの時代」というテーマでした。日本的経営の一つの側面として、特に経済的不況の局面になると、いろいろな問題を社内で隠蔽した結果、会社が大きく傾くということが沢山発生しました。それにどう対応していくのか、あるいは日本の経済界、政府はどう対応させようとしているのかをお話ししました。地方都

市である釧路で大企業の話をしてどうなのか、という観点からは、十分な課題設定だったかを反省するところです。私が研究する経営学の多くは大企業が対象ですので、釧路の方が求めるものとの乖離が埋めがたく、苦勞しました。

3回目は昨年「北陸都市探訪」です。前2回の反省を踏まえて、市民の皆さまが関心を持てるものを、と思えました。研究のサブテーマの一つにイタリア研究があります。時間があればイタリアの都市を回ってみたいと思ってきました。人口3万とか5万とかの都市でも、生活が豊かで市民活動も活発で、自給自足的な経済の仕組みができていたりします。どうしてそのような地方都市が存立し続けているのかが私の研究テーマです。わかりやすく写真を交えながらお話しする計画でしたが、残念ながらイタリアに行く機会をもてませんでした。そこで、日本でイタリアの都市に近いと言われている北陸をテーマにしました。市民の皆さんの反応は前2回に比べて良かったのではないかと思います。市民の皆さんに理解していただく、関心を持っていただくようなテーマ設定を意識するのですが、同時に自分の専門性を活かした形にすると、かなり難しい課題になってくると思うのです。

皆月 小路先生の話では、地域に目を向けて公開講座の準備をされていると感じました。小路先生のお話のように、世界から地域に、地域から世界に目を向け、聴講する人々に分かりやすい話をしていくというのは、大学教員としての謙虚な姿勢の証ではないかと思います。

三輪 私の研究は釧路とは直接関係がなく、開発経済学とあって、カンボジア等の発展途上国の経済発展や、貧困問題などを主に研究しています。公開講座では、途上国の現状に興味を持ってもらえる、かつキャッチーなテーマが良いかと考えました。「数字で学ぶ世界の貧困」という題名をつけ、貧困者数や小学校の就学率などをクイズ形式にし、皆さまに参加していただく形で行なった記憶があります。市民の方からひとつふたつ質問があったので、少しは良い情報を提供できたのかな、という気がしています。

皆月 先生方も、聴講する人々に伝わるよう工夫されているんですね。世の中では、お堅い、難しい話をする印象の大学教員ですが、おおらかでソフトな人たちです。公開講座は参加者が少ない時期もありましたが、近年は増加傾向です。謙虚な姿勢で公開講座を作っていく努力が、人々の共感を呼び、地域に浸透しているのではないかと思います。

市民の皆さまが公開講座や大学教員に抱いていたイメージについて、二人の教員からの話を聞いて、何か変化はあったでしょうか。大学は難しい学問を話すところだというイメージは変わりましたでしょうか。

色木 そうですね。我々は数少ない機会ではありますが、それを享受できてありがたいことです。

中村 「違う分野の先生たちがどんなことを研究しているのかな」と、身近に感じます。統計とかはたしかに難しいですが、こういうことを地道にされているのだなと。それぞれの分野でいろいろな人がいる。それを知ることができる機会です。

公開講座の町村会場のエピソード、緊張感とドキドキ感

皆月 ここで、公開講座の町村会場に話題を変えたいと思います。本学の公開講座は町村会場でも開催しており、釧路管内の1市6町1村で実施しています。釧路管内の面積は、日本の面積順位24位の茨城県(6,097km²)にならぶ5,997km²と広域です。2020年7月31日現在の住民基本台帳データによると、釧路管内の人口は22万5,158人で、このすべての住民が公開講座の聴講対象です。一公立大学が茨城県ほどの面積をカバーし、30年間も公開講座を続けているのは、他に例がないと思います。

長距離、長時間移動の町村会場もあります。私は「夕食をご持参ください」と事務局からアナウンスされ、移動中の車内で食べた思い出があります。小路先生、三輪先生も町村会場へ向かわれたと思いますが、移動中のエピソードなどをお聞かせください。

小路 1回目はどこの町村会場に行ったか記憶がないです*¹。2回目は弟子屈町で、3回目は阿寒町に行きました。自分の車で単独で行ったのです。町村会場は遠いので、事務局は早く出発しなければならぬ。私も一緒に行くとかかなり時間がとられてしまうので、講演する時間だけピンポイントで行って、パッと帰ってくるという形でした。弟子屈で一緒だった金子先生は一泊されたようで、他の方とお酒を飲んだと言っていました。私は途中の温泉に入りまっすぐ帰ってきました。

*¹ 平成7年度鶴居村にて講演

三輪 阿寒町で、ご飯を食べる場所がなかなか見つからなかったことを覚えています。町村会場は帰りが遅くなりますが、当時は子供がまだ小さく1歳になるくらいの時だったので、ちゃんと寝ているのか心配でした。事務局の方とはわりと仲が良かったので、移動中の話は盛り上がりました。

皆月 平成18年度(2006年度)の公開講座では、共通テーマ「混迷する現代—変化への挑戦—」において、私は「あなたはどうするのか?—冬季の地震災害時に

おける屋外避難」というテーマで講演しました。阿寒町での講演では、地域の問題を町民の皆さまと共有するために、本学で講演した内容に加えて、火山噴火の避難についての話題を含めました。この講演のためにゼミの学生達と雌阿寒岳登山を行い、噴火口も実際に見てきました。町村会場では、阿寒町公民館のように聴講席との距離が近いこともあり、休憩の時は、町民の皆さまといういろいろな話をすることができました。

公開講座で得られた知識が、自らの考え方や価値観を変える

皆月 ここで、公開講座が皆さまの人生の考え方・価値観などに与えた影響についてお伺いしたいと思います。市民の皆さまの記憶に残っている公開講座のイチオシの分野、または具体的な講演内容を教えていただけますか。

色木 最初に参加したのは3年前、「ロック・ミュージックとアイルランド近現代史(平成29年度(2017年度):藤田祐 准教授)」です。音楽をする友人に誘われて参加しました。大学の講義とは疎遠でしたが、この講座ではアイルランドの歴史と音楽において、歌詞に含まれる精神的なものや、その時代の若者のはげ口のようなものが読み取れることなどを教わりました。「大学ってこんなことをやっているのか」という驚きがありました。学問は学校に行って学ぶだけだという認識でしたが、お客さんのように学ぶのではなく、自ら目を向けるものが世の中にあるということも気づかされました。その後公開講座に興味を持ち、自分の仕事に生かせるものもあるかと勉強を始めました。



皆月 色木様の人生の考え方、価値観が公開講座によって変わり、学問に対して能動的に向き合えるようになったのですね。中村様はどうですか。

中村 アイルランドの話ですが、令和元年度(2019年度)の公開講座でもありましたね*²。先生たちがアイルランドの何に興味を持って話をしているのか、腑に落ちたような気がしました。釧路と似た空気感というのか、何気ないところに共通点を見つけ、そこの人たちはどのような暮らしをしているのかなど……華々しいことではなく、地道に生きていることが良いのではないかと思います。

令和元年度(2019年度)の小路先生の「北陸都市探訪」はとても面白かったです。あまり太陽が出ない特殊な地域だと思うのですが、そこの人たちの地道な生活や、昔から受け継がれていることなどを基本に、そこから新しい生活を見つけていることを学ばなければいけないと思

いました。以前、金沢に3年半住んでいましたが、冬はお日様が出ず、11月頃になると「これが今年最後のお日様かもしれない、皆外に出て見てください」となる。北陸で生きている人にはそれが喜びになるのです。

*² 「遠く離れた、「優良事例」でもない、ほんの一つの地域から学ぶ(令和元年度(2019年度):北島義和 准教授)」

皆月 北陸をテーマにした小路先生の公開講座を聴講し、中村様の人生の価値観や考え方、釧路と比較してお日様が出ていることがこんなにもありがたいということを整理されたのですね。私も北陸出身ですが、「弁当を忘れても傘忘れるな」ということで共感できます。皆さまの興味や関心事の中で、今後の公開講座で希望するテーマや内容はありますか。

色木 一回も公開講座に参加したことがない人が興味を持つようなテーマをやっていただけると良いのではないのでしょうか。今後に期待することは、地域の経済や少子高齢化、社会問題に対して、市民一人一人が実際にどのような活動ができるのかに寄与する内容であってほしいです。

中村 私は今になって歴史が大事だなと思います。なぜ今こうなるのかということ掘り下げて教えていただければ、楽しく聴けるのではないかと思います。政治も経済も歴史からずっと繋がってきていると思います。ものの考え方など、そういうものは歴史抜きではわからないのでは。目先のことだけではなく、掘り下げて考えていくのであればいいと思います。

皆月 続いて教員の皆さま、今後の公開講座の講演テーマになるかも知れませんが、現在の研究内容について教えてください。

小路 明治以降、国民国家という枠組みを確立しなければ、私たちは世界の中で生きてこれなかった。国民として国家に包摂され、税金で社会福祉を受ける関係にある中では、自らの主体性を確立していくことは難しい構造になっている。経済は国際競争の中に置かれている訳ですから、この競争に国をあげて対応しなければならぬ。その効率的な対応は大企業を育てて対応することでしょう。一方で私たちは、地域社会を形成し、そこで自立的に生活を組み立てていかなければならない。国民として国家に統合される面と、地域社会の市民としては自立的に生きていかなければならない面とがある。国際経済は大企業依存が強まり、統合される面は戦後精緻化されて、その側面がどんどん強まってきたのではないかと。地域社会、地方都市の衰退はこのような中で発生した問題でしょう。どうこの構造の展開に歯止めをかけ、地方都市の自立性を確保することができるかが私の現在の研究テーマです。それに本学がどのような貢献をできるのかという、学長としての課題もあります。



皆月 壮大なテーマで研究されていますね。町村会場の皆さまへのメッセージも、お話しいただけますか。

小路 この夏、入試委員長として地方の高校を回ってきました。標茶、弟子屈、白糠、阿寒、霧多布と、多くの高校では校長先生が出てこられ、私との対談を心待ちにしてくださいました。地域に子供がいないので、高校が存続していけるかどうかの大変な局面になっている。公開講座でどうこうではなく、その地域に対して本学がどのような支援ができるのかということも、真剣に考えていかなければいけない。高大連携という手法だけにとどまらない、様々な期待をされていると感じています。その一環として、公開講座をどのように使っていくのか。何らかの打開策を構想していただけるかと、委員長へ期待しているところです。

皆月 がんばります。続いて三輪先生、現在の研究内容と町村会場に向けたメッセージをお願いします。

三輪 今、カンボジアは服や靴、旅行鞆などの縫製工場が増えていて、日本でもかなり輸入しています。昨日、日本のアパレル製品の輸入先を調べていたのですが、カンボジアは10位以内に入ってきて3%くらいで、増加傾向です。この先縫製工場が地方にも建ち、農村部の生活にどう影響していくのかを勉強しているところです。今の世の中は世界との繋がりが多くなってきていますが、多くなればなるほど世界を意識しなくなっている感じがします。以前は「この服すごい!ベトナム産だっ」と言っていたのが今や当たり前になり、原産地を見ることもなくなりました。実は、日本は他の国がないと生きていけない状況になっていますが、私たちは日々の生活に支配されているので、なかなか他国や、そこに住む人たちについて考える機会がない。公開講座で自分の研究を紹介し、普段考えないことや生活の中での他との繋がりに、皆さまに立ち止まって考えてもらおうきっかけを作る。それを続けていけば、自分が今後どうしたらよいのかということも伝わるのではないかと思います。



30th Anniversary 座談会

大学教員は専門バカでなく、教養人たれ。 公開講座は、研究者の教養が試される場

皆月 座談会も終盤になりました。締めくくりに感想として、「私にとって公開講座とは」を述べていただけますか。

色木 公開講座は大学と地域住民との接点かな、と考えていたのですが、「大学側が公開講座をどう使うか」という話があったように、我々もどう吸収するかを考えていかなければいけないと思いました。準備していただく方の労力があるので、受ける方も当然同じように労力をかけても良いのでは、と。今後も公開講座にはぜひ参加したいです。一回も行ったことがない人がいるのなら、連れて来たいと思いました。

中村 先生方が工夫されている話を聞いて良かったです。「知るは喜びなり」というように、今まで経験してきたことに対して「やっぱりそうなのか」と納得し、知識が見えてくるようなものがあり、期待しています。公開講座に興味を持てるようにというなら、先生たちのプロフィールなど、例えばどこの出身で釧路とはどのように違うなどを話していただけると、親しみやすいと思います。

小路 市民のお二人から大変貴重なお話を聞かせていただきました。自分自身がその課題に取り組んでいけることまで導いてくれるような講座を期待するというご発言がありましたが、これは非常に重要な指摘で、大変な課題だと思います。

経済学部が集まっている教員の多くは経済学者と経営学者です。社会科学と呼ばれるこの学問領域は、対象を要素に分解して認識するという手法です。どこに問題があるかを把握することには優れていても、そこからどういう打開策が見えてくるかという方向性がセットになっていないのです。分析を聞いても、そこから課題の打開に向けての道筋は示されていないし、別途自分で考えなくてははいけない。

そういう理由で、なかなか疎遠なものになっているのではと思います。

経済学者や経営学者は、専門家と呼ばれても、同時に専門バカという風にも揶揄される存在です。包括的な知識を持った教養人ではなく、部分的な専門分野の知見しか持っていない人だと言われる。そういう私たちが市民の前に出ることは、まじめな人であれば相当恐怖感があると思っ

ていいのではないのでしょうか。私はいくつかの研究テーマを持ち、市民の皆さんの前で30年間やってきましたが、上手く役割を果たせたのか、まだ未完です。何ともいえません。今回、市民のお二人からお話を聞いて、本当に問題点をわかっているのだなと思いました。それを教員にも理解してもらって、震えながらも公開講座を頑張ろう、と。そういう形になるのはベターだと思いますので、本日の企画は良かったのではないかと思います。

三輪 公開講座では地域の話や、身近な話をしてほしいと住民の皆さまは思っているのかな、と考えていたのですが、学生が大学で学んでいることを純粋に知りたいというお話もありましたね。今まで自分がやってきたことは必ずしも地域のことでありませんでしたが、それはそれで意味があったと認識したところでした。

釧路地域ではおそらく、今後人口が減り、子供の数が減っていく。その中で本学がどういう存在であり続けるのかを考えると、地域にも目を向けていかなければいけない。公開講座の中でも、皆さまとの繋がりを大事にすることが今後ますます必要になってくると考えます。まずは公開講座を聴きにに来てもらい、それをきっかけに住民と大学が連携しながら、釧路地域がより良い、住みやすい町になるよう、貢献できればいいと思います。

皆月 30th Anniversary 座談会「私と公開講座」を通じて、この先に向かう公開講座のあり方が見えてきたと同時に、大学と市町村の住民の結びつきを確認できたと実感します。皆さま、本日はありがとうございました。



講座内容の 分析結果

これまでに、131のテーマで239回の公開講座が開催されてきました。公開講座のテーマ名における単語に注目すると、経済が21回、経営が8回登場しています。このことから、公開講座は、経済学科と経営学科を有するという本学の特徴が反映されていると言えます。しかしながら、経済や経営といった社会科学関連の講座のみが開催されていたわけではなく、人文科学や自然科学関連の講座もあり、社会科学を中心とした講座が開催されてきたのであります。

また、これまでに開催された公開講座は、本学の建学の理念に即していると言えます。1つ目に、各テーマの単語を見ると、地域(12回)、釧路(8回)、北海道(5回)という単語が登場しており、「地域に結びつき開かれた大学」という本学の建学の理念が反映されています。2つ目に、日本国内に関するテーマのみならず、アメリカ、ロシア、メキシコ、カナダといった海外諸国、すなわち、国際的なテーマの講座も開催されており、本学の「国際性を重視する大学」という本学の建学の理念が反映されています。3つ目に、社会科学を中心とした講座が多岐にわたって開催されている一方で、パソコンによる計算や集計といった実践的な講座も開催されています。さらには、平成11年頃の会計ビッグバン、平成20年頃のサブプライムローン問題、令和元年頃の教員の働き方問題など、時代に即した実践的なテーマの講座も開かれています。こうした点から、「理論と実践の相まった大学」という本学の理念が反映されています。

このように、経済や経営といった社会科学を中心とし、そして、建学の理念に即した講座、すなわち、本学の特徴が反映された公開講座が30年にわたって開かれてきました。

企画委員・曾我 寛人(釧路公立大学准教授)

表1 テーマにおける頻出単語と出現回数

単語	経済	考える	地域	釧路	経営	問題	政策	日本	学ぶ	見る	都市	ロシア	環境	産業	地方	北海道	観光	関係	研究	事例	社会	世界	文化	
出現回数	21	14	12	8	8	8	7	7	6	6	6	5	5	5	5	5	4	4	4	4	4	4	4	4

図1 テーマにおける主要な単語と期間のネットワーク

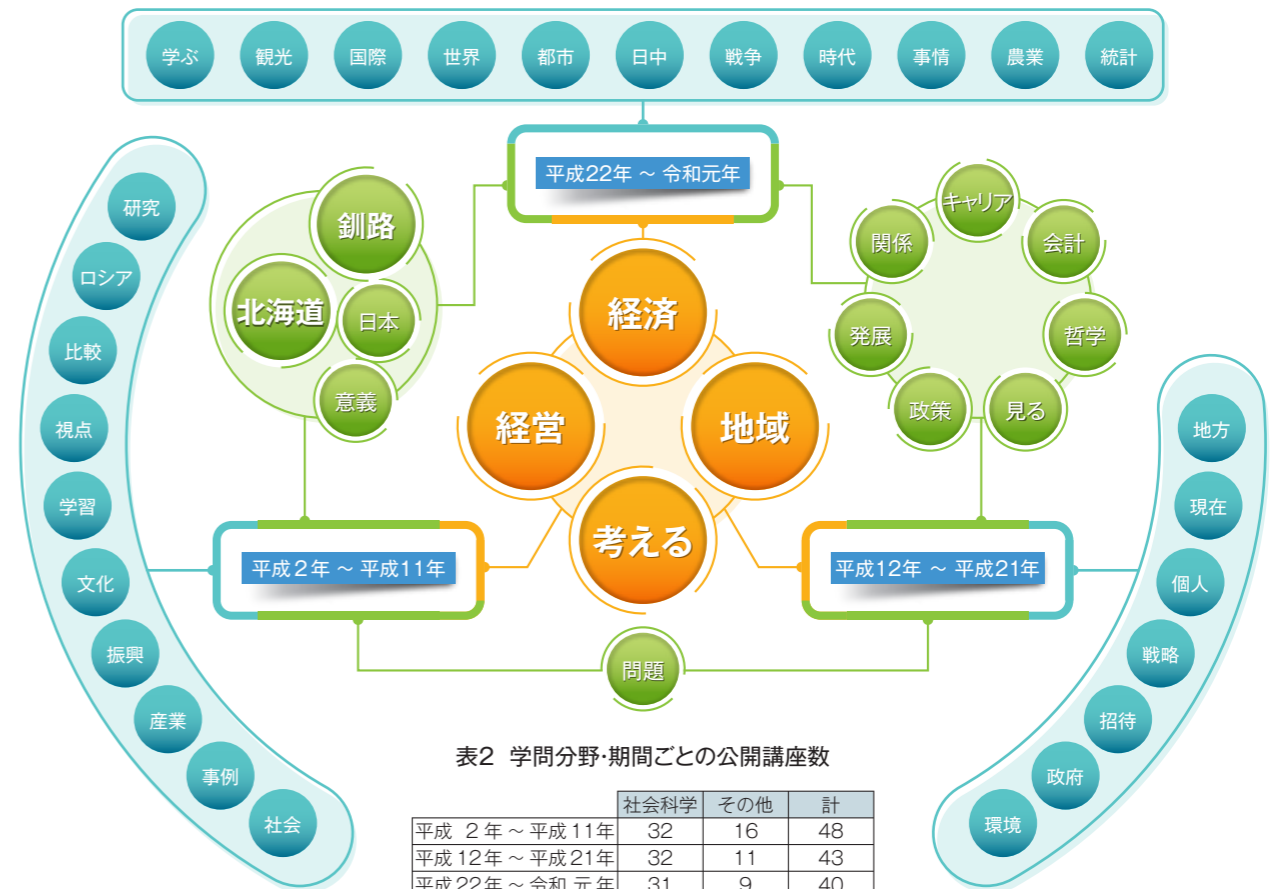


表2 学問分野・期間ごとの公開講座数

	社会科学	その他	計
平成2年～平成11年	32	16	48
平成12年～平成21年	32	11	43
平成22年～令和元年	31	9	40
計	95	36	131



公開講座・受講者数の推移

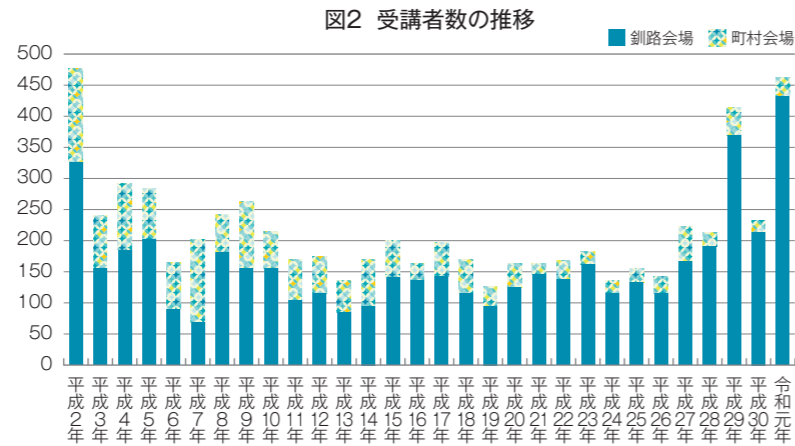


図2は、第1回目から第30回目までの受講者数の推移を、釧路(大学)会場と町村会場に分けて示しています。最も受講者数が多かったのは第1回目(合計でのべ478名)で、初めての公開講座と本学に対する期待の高さを反映したものと考えられます。2回目以降は、概ねのべ150名以上の参加をいただいています。2015年以降の受講者数の増加は、道民カレッジおよびくしろ市民大学との連携もその一因と考えられ、引き続きの連携に加え、さらに魅力ある講座を展開していく必要があります。

講座名(テーマ)と受講者数の関連をみると、「北海道」や「釧路・釧路管内の町村名」とそれらと所縁のある地名、あるいは「地域」「地方」と講座名に入っているものについて、釧路会場でも町村会場でも、他のテーマの講座と比べて、平均して1~2割ほど受講者数が多くなる傾向があります。これにより、多様なテーマがある中でも、より身近なテーマに対する期待や関心の高さがうかがえます。

企画委員・三輪 加奈 (釧路公立大学准教授)

参加者が公開講座に何を期待しているのかについて、平成23年度以降の会場ごとの参加者の年齢構成の割合から考えてみたいと思います(図3)。

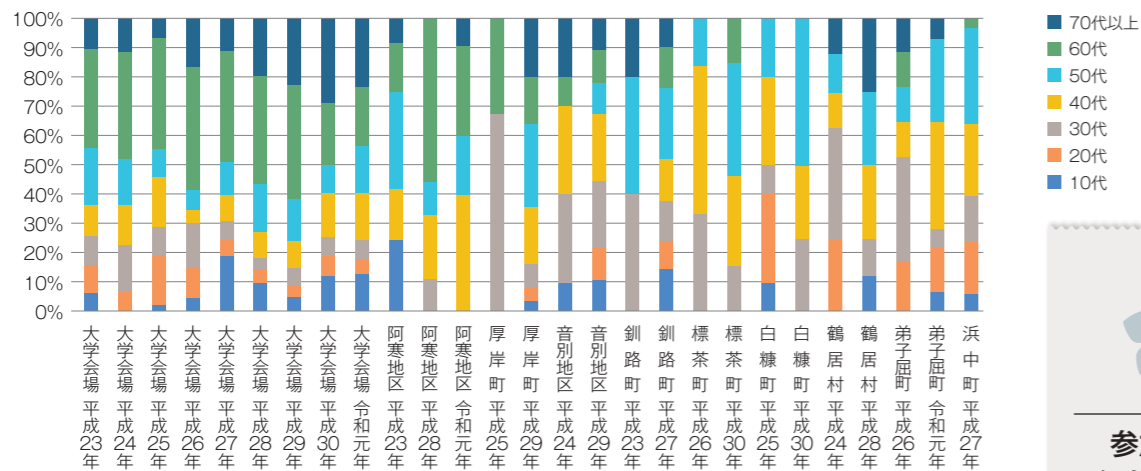
大学会場について、まず言えるのが、60代以上が常に4割以上を占めていることです。この背景として、退職するなどで時間に余裕のある年齢層が生涯学習の一環として参加してくれていることが考えられます。20・30代は平成26年度までは2~3割程度を占めていたのが、平成27年度以降は1割程度へと減少しています。その代わりに割合が増加したのが10代です。平成30・令和元年度では、10・40代が合わせて3割を占めるようになっており、10代の参加が多い年度は地元の高校生の参加が見られると同時に専業主婦(夫)の参加者数も多いことから、40代の増加は高校生の保護者の参加のためと考えられ、今後も保護者を含めた高大連携の場としての役割を公開講座が果たすことが期待されます。

各町村会場については、同じ町村でも年度ごとに参加者の年齢構成には大きな差があります。これは各町村の担当者が広報に力を入れてくださった年齢層や、テーマによって参加者の年齢層が変わるためと考えられます。大学会場と比較した場合に興味深いのは、60代以上の割合が小さく、20~50代の割合の大きさが目立つことです。退職者層の生涯学習というよりも就業年齢層が実践的な情報や教養を求めて参加する傾向があると考えられます。

このように、参加者の年齢構成を見ることで、大学会場と各町村会場との間で公開講座への需要のあり様が異なることがうかがえます。

図3 会場・年度別参加者の年齢構成

企画委員・中山 大将 (釧路公立大学准教授)



参加者の年齢構成について



感想・要望

公開講座に対する聴講者の

公開講座の開催に際しては、本講座の内容及び運営の改善を目的に、聴講者へのアンケート調査が実施されてきました。聴講者からは、講義内容や講義方法に対して有益な意見が多数寄せられてきました。こうした聴講者からの感想・要望は、大きく積極的な意見、消極的な意見、そして提案型の意見に分けることができます。聴講者からの感想・要望は多岐にわたりますが、それらは今後、釧路公立大学の公開講座がどのように改善・発展するべきかを検討する上で貴重な財産となっております。以下では、平成28年度から令和元年度までの聴講者アンケートの結果から、公開講座への感想・要望についてその一部を抜粋して紹介します。

平成28年度テーマ

キャリアについて語る、認知言語学、世界の貧困、経済学と費用

頻出語 興味深い わかりやすい 聞き取りにくい

積極的な意見

- ・経済学の考え方が理解できた、金儲けではない考え方を生かし、経営学を学んでみたい。
- ・具体的事例を挙げてもらい、よく理解できました。
- ・貧しい国のことがいろいろと数字によって少し理解することができました。
- ・経済学を学ぶ機会はないので、わかりやすい説明で受講できてよかったです。
- ・久しぶりに言葉の勉強をしたような気がします。大変興味深い内容でした。言葉の変化の過程が興味深かったです。

消極的な意見

- ・あまりに盛りだくさん過ぎて難しい事ではないが、その数字が何を意味するのかの説明になってしまい、理解が十分でなかった。
- ・語尾が聞き取りにくかった。何が言いたいのか理解しづらかった。
- ・声が小さい、また発音がよくなく聞き取りにくいところがあった。
- ・難しくわからなかったため資料がほしいかった。

平成29年度テーマ

頻出語 アイルランド 日中関係 わかりやすい

資源と日中関係史、箱館戦争と道東、近現代アイルランド、都市論

積極的な意見

- ・アイルランドの政治的紛争が少し理解出来た。同一民族、カトリック教、プロテスタント、政治信念など複雑な対立要因が存在する事が理解出来た。興味あるテーマでした。
- ・資料に従って丁寧に分かり易い説明で良く理解出来た。
- ・日中関係の事を少しは理解する事が出来た。
- ・かみくだいて説明して下さい分かり易かった。
- ・今迄日本側の狭い知識しか持っていなかったが初めて分かり易く教えて下さり嬉しかった。

消極的な意見

- ・限られた時間の中、焦点を絞った方がより理解しやすかった。
- ・割愛が多すぎて理解が追い付かず困ってしまった。
- ・1時間半でする内容では無いのでは? タイトルの内容に絞ってほしいかった。
- ・テーマと講義内容の関連性を理解しづらかった。



声 02

聴講者からの

平成30年度テーマ

第三者委員会と企業統治、進数、教員の働き方、医療政策

頻出語 進数 教員 第三者委員会 わかりやすい

積極的な意見

- ・日本の教育の歴史的経緯や諸外国との違いなどよく理解できました。
- ・4講座すべて受講させていただきました。とても分かりやすく理解でき有意義な時間でした。ありがとうございました。
- ・今までとつきにくかった〇進数のことがわかりました。ありがとうございました。
- ・ふとした失敗を交えて場を和ませたり、グラフ等で説明してくれたので、分かりやすかったです。
- ・第三者委員会がどのような役割を担っているのかが、とてもよくわかりました。

消極的な意見

- ・教員の労働時間の短縮の具体的な方向を聞きたかった。
- ・参考になったが、もう少し深く解説してほしいかった。
- ・釧路の経済状況について講座してほしいです。又は、話し合いの場を作ってほしいです。

令和元年度テーマ

頻出語 地域 アイルランド 校下 難しい わかりやすい

農村社会学、北陸都市論、住民・企業の地域間移動、哲学との出会い

積極的な意見

- ・数字の羅列ではなく、うまくいかない具体例だったので興味深く聞いた。最近のアイルランドについても良かった。
- ・“校下”という言葉が初めて知ったが、北陸の地域性をよく知ることができた。
- ・難しい哲学について面白く分かりやすく説明して下さったので良く理解できました。
- ・哲学により興味をもち、本を再度読み直したいと思えた。

消極的な意見

- ・やはり資料があったら良かった。メモをとるのが大変。
- ・理論解説中心の内容では市民向けではない。もっと具体的な例を示し、地域がどのような方向へ進めばよいか見解を出してもらいたかった。
- ・なるべく時間内で終わらせてほしいです。質問は何人までなどというようなルールを作った方がよいと思います。

企画委員・上山 一 (釧路公立大学准教授)

これまでの公開講座実施状況（平成2年度～令和元年度）

第1回公開講座【平成2年度（1990年度）】		
開催場所及び参加人数（合計）：大学会場（330）・厚岸町（82）・白糠町（66）		
講師名	職名	講座名
高野 敏行	助教授	グリム童話について
徳田 欣次	教授	地域開発と港湾
高嶋 弘志	講師	釧路管内の文化財 ― 古文書の保存をめぐる
吉武 清彦	教授	21世紀と日本経済
第2回公開講座【平成3年度（1991年度）】		
開催場所及び参加人数（合計）：大学会場（159）・鶴居村（51）・阿寒町（32）		
講師名	職名	講座名
鷹田和喜三	教授	釧路市への漁業移住の社会的背景 ― 富山県・新潟県の事例
		北海道の生活文化のルーツを考える ― 鶴居村の岐阜団体と禊教を事例として
萩原 充	講師	中国工業化の過去と現在
森山 弘毅	教授	上代の恋の表現について
土井 時久	教授	経済学とパソコン
		農村経営とコンピュータ
第3回公開講座【平成4年度（1992年度）】		
開催場所及び参加人数（合計）：大学会場（187）・標茶町（42）・浜中町（63）		
講師名	職名	講座名
石黒 匡人	講師	法と裁判について考える
小林 和夫	助教授	アイヌ集落の分布について
西村 正一	教授	食糧と農業
岡崎 由夫	教授	湿原と海岸のなりたち
第4回公開講座【平成5年度（1993年度）】		
開催場所及び参加人数（合計）：大学会場（204）・釧路町（35）・弟子屈町（46）		
講師名	職名	講座名
鎌田 耕一	助教授	ゆとり社会の条件 ― 日本とドイツ
岩田 文男	教授	ラウスハネガヤの生活史とラウスコンブノ生産
棧 優	助教授	現象学の意味について
大場 正巳	教授	釧路と帯広 ― “マチ”は似通ってきた？
		〈明治農法〉の導入過程 ― 山形庄内1農民の日記から
第5回公開講座【平成6年度（1994年度）】		
開催場所及び参加人数（合計）：大学会場（92）・音別町（45）・白糠町（30）		
講師名	職名	講座名
高橋 欣也	教授	釧路の人口について考える
河村 一	助教授	音別町の経済活性化について考える
村山 康宏	教授	パソコンによる方程式の解き方
村上 文司	教授	企業行動の国際化と摩擦 ― 日米自動車摩擦を中心に
第6回公開講座【平成7年度（1995年度）】		
開催場所及び参加人数（合計）：大学会場（70）・鶴居村（48）・厚岸町（85）		
講師名	職名	講座名
坂本 猛	教授	生涯スポーツ時代
小路 行彦	講師	雇用制度の明日を探る
米山 祐司	助教授	灯油価格はなぜ上がったか ― 湾岸戦争時における石油業界の在庫品評価問題
長名 洋次	教授	子供の非行について
第7回公開講座【平成8年度（1996年度）】		共通テーマ：ロシア学入門
開催場所及び参加人数（合計）：大学会場（185）・阿寒町（19）・標茶町（39）		
講師名	職名	講座名
荒又 重雄	学長	ロシア経済研究の楽しさと難しさについて ― これまでの個人的体験を含めて
柴崎 嘉之	教授	最近におけるロシアの経済事情
松井 憲明	教授	ロシア史 ― 歴史の無駄遣い？
宮崎 武俊	助教授	楽しく覚えるロシア語アルファベット ― 初公開・日本人のための新しい学びかた ―
第8回公開講座【平成9年度（1997年度）】		共通テーマ：言語と異文化理解 地域経済 環境と観光 21世紀の教育
開催場所及び参加人数（合計）：大学会場（157）・弟子屈町（62）・浜中町（44）		
講師名	職名	講座名
宮下 幸一	助教授	日英語比較から見た異文化交流
金子 康朗	助教授	異文化コミュニケーションにおける言語使用の諸問題
新山 毅	教授	産業連関表からみた釧路市経済の構造と特徴
加藤 和暢	教授	新しい都市づくりの視点 ― 「相互学習」の必要性
		「ひがし北海道」における観光産業の現状と問題点
小林 聡史	助教授	自然保護とエコツーリズム
		湿地における自然学習と環境教育
長名 洋次	教授	地域振興と生涯学習
第9回公開講座【平成10年度（1998年度）】		共通テーマ：英語圏の文化と経済
開催場所及び参加人数（合計）：大学会場（156）・音別町（22）・釧路町（38）		
講師名	職名	講座名
栗山 久策	教授	「あなたは、野球ですか。それともベースボールですか」？
嶋 茂幸	助教授	「嵐が丘」の世界 ― その倒叙法について ―
宮下 徹	助教授	日本とアメリカの経済システムはどう違う？ ― 「日本型資本主義」と「アメリカ型資本主義」との比較 ―
粟沢 尚志	講師	文化と経済のジレンマ ― 社会保障からの視点
第10回公開講座【平成11年度（1999年度）】		共通テーマ：地域の産業振興
開催場所及び参加人数（合計）：大学会場（106）・鶴居村（41）・白糠町（24）		
講師名	職名	講座名
大塚 秀雄	教授	漁業経営における水産加工振興の意義

長尾 正克	教授	酪農経営における乳製品加工の意義
大澤 勝文	講師	地方産業振興における市場対応の重要性 ― 新潟県三条地域の金物製造業・卸売業を事例として ―
工藤 賢資	教授	物事をすべて表と裏の2面でもらえてみよう ― 貸借対照表（バランス・シート）の基本的考え方 ―
第11回公開講座【平成12年度（2000年度）】		
共通テーマ：地域から環境問題を考えてみよう！ インターネットって何だろう？		
開催場所及び参加人数（合計）：大学会場（118）・厚岸町（38）・標茶町（19）		
講師名	職名	講座名
小林 聡史	助教授	環境問題と市民
山崎 幹根	助教授	地方分権時代の環境・開発・自治
阿部 順一	助教授	インターネットの光と影
佐藤 信行	助教授	インターネットと法
第12回公開講座【平成13年度（2001年度）】		共通テーマ：これからの地域政策を考える
開催場所及び参加人数（合計）：大学会場（87）・阿寒町（25）・弟子屈町（24）		
講師名	職名	講座名
新山 毅	教授	釧路地域の経済と産業
宮下 弘美	助教授	経済政策の功罪
中園 桐代	助教授	母性神話と地域の育児支援策
小磯 修二	教授	地方分権下の地域政策
第13回公開講座【平成14年度（2002年度）】		共通テーマ：現代経済の散策
開催場所及び参加人数（合計）：大学会場（97）・釧路町（46）・浜中町（28）		
講師名	職名	講座名
申 賢洙	助教授	マーケティングの新潮流
坂井 吉良	教授	中央政府と地方政府の知性とモラル
正木 響	助教授	グローバリゼーションとアプリカ
水田 浩之	助教授	確率論と経済
第14回公開講座【平成15年度（2003年度）】		共通テーマ：変革期を読む
開催場所及び参加人数（合計）：大学会場（143）・鶴居村（37）・音別町（22）		
講師名	職名	講座名
西村 友幸	助教授	経営戦略の構想
濱田 弘樹	助教授	会計ビッグバンの社会に与えるインパクト
三宅 伸治	助教授	年金問題 ― 世代重複モデルの応用 ―
鷹田和喜三	教授	都市農村の交流とグリーンツーリズム
第15回公開講座【平成16年度（2004年度）】		共通テーマ：歴史との対話
開催場所及び参加人数（合計）：大学会場（138）・厚岸町（11）・白糠町（16）		
講師名	職名	講座名
高野 敏行	教授	哲学のことば
伊藤 正範	助教授	ターウィニズムと西洋
矢澤 久純	助教授	裁判官は離婚をどう見てきたのか？ ― 有責配偶者の離婚請求に関する判例の変遷 ―
春日部光紀	助教授	経済・経営環境の変化と近代会計学の発展
第16回公開講座【平成17年度（2005年度）】		共通テーマ：日本の現在を読む
開催場所及び参加人数（合計）：大学会場（145）・標茶町（7）・弟子屈町（46）		
講師名	職名	講座名
高嶋 弘志	教授	歴史は繰り返すのか ― 日本の国際認識をたどる
		標茶村上田源松の終戦日記をめぐる
新井 誠	助教授	現代における議会と国民 ― 憲法規範から読み解く
萩原 充	教授	日中関係を考えるー現在、過去、そして未来
岡田 浩	助教授	住民と地方政府の関わりを考える
第17回公開講座【平成18年度（2006年度）】		共通テーマ：混迷する現代 ―変化への挑戦―
開催場所及び参加人数（合計）：大学会場（117）・阿寒地区（23）・浜中町（31）		
講師名	職名	講座名
皆月 昭則	助教授	あなたはどうするのか？ ― 冬季の地震災害時における屋外避難 ―
内藤 徹	助教授	ゲーム理論の世界をのぞいてみませんか
加藤 一郎	助教授	キャリアについて考える ― 組織と個人の関わり方
		個人と組織の生き残り ― 経営戦略とキャリア形成
秋山 修一	助教授	エネルギー分野における規制改革と地域経済 ― 電力自由化を考える
第18回公開講座【平成19年度（2007年度）】		共通テーマ：国際比較の共演
開催場所及び参加人数（合計）：大学会場（96）・音別地区（9）・釧路町（23）		
講師名	職名	講座名
芹田 浩司	准教授	メキシコにおける経済自由化と発展戦略の転換
市川千恵子	准教授	ネオ・ヴィクトリアン小説からみる英国事情
岩澤 哲	准教授	フランス家族法の現在 ― 比較法への招待
鈴木 慶夏	准教授	文法論への招待 ― 中国語教育の観点から
第19回公開講座【平成20年度（2008年度）】		
開催場所及び参加人数（合計）：大学会場（125）・鶴居村（14）・白糠町（26）		
講師名	職名	講座名
棧 優	教授	メルロ＝ポンティの哲学について
神野 照敏	准教授	学説史の視点から見たサブプライムローン問題
島 信夫	准教授	監査論からみた内部統制の変遷についての考察
尾崎 泰文	准教授	サブプライム問題とは何か？
		ーから学ぶ経済学
第20回公開講座【平成21年度（2009年度）】		共通テーマ：文学の言葉と政治の言葉
開催場所及び参加人数（合計）：大学会場（148）・厚岸町（7）・標茶町（10）		
講師名	職名	講座名
大貫 隆史	准教授	演劇研究への招待 ― レイモンド・ウィリアムズ『上演に見るドラマ』を読む
金原いれいね	准教授	手は口ほどにものを言う：身振りと思いの関係
菅原 和行	准教授	政治学にふれてみよう！
下山 朗	准教授	自治体財政の見方 ― 夕張市の財政破たんから考える ―

第21回公開講座【平成22年度(2010年度)】			共通テーマ：現在の社会経済と人間
開催場所及び参加人数(合計)：大会会場(139)・浜中町(19)・弟子屈町(11)			
講師名	職名	講座名	
小路 行彦	教授	ガバナンスの時代	
金子 康朗	教授	感情の機能と感情システムの内部構成について	
宮下 徹	教授	マクロ経済学と日本経済	
小野瀬善行	准教授	日米における教員政策について	
第22回公開講座【平成23年度(2011年度)】			共通テーマ：北海道の国際化と東アジア
開催場所及び参加人数(合計)：大会会場(163)・釧路町(6)・阿寒地区(16)			
講師名	職名	講座名	
河村 一	教授	北海道から国際化・グローバル化を考える	
松井 憲明	教授	サハリンの観光事情について	
鈴木 慶夏	准教授	中国語圏の人々から見た北海道・道東	
申 賢珠	教授	韓国の主要都市における観光政策が北海道の観光政策に示唆するもの	
第23回公開講座【平成24年度(2012年度)】			共通テーマ：決断力の経営
開催場所及び参加人数(合計)：大会会場(118)・鶴居村(9)・音別地区(10)			
講師名	職名	講座名	
宮下 弘美	教授	経営者・政治家たちの「決断」―戦前の日本の経済発展をめぐって―	
阿部 順一	准教授	Excelを意思決定に―ピボットテーブルとソルバー―	
濱田 弘樹	教授	意思決定(決断)を裏付ける「会計」を理解しよう	
西村 友幸	准教授	アリストテレスに学ぶ事業の定義	
第24回公開講座【平成25年度(2013年度)】			共通テーマ：転換期の地方を考える
開催場所及び参加人数(合計)：大会会場(135)・白糠町(12)・厚岸町(10)			
講師名	職名	講座名	
辻 信幸	准教授	「1票の格差」を地域から考える	
小林 聡史	教授	ラムサール条約釧路会議(1993)の意義と環境問題	
大澤 勝文	教授	「売れるものづくり」からみた地場産業の課題	
加藤 和暢	教授	「地域経営」の常識・非常識	
第25回公開講座【平成26年度(2014年度)】			
開催場所及び参加人数(合計)：大会会場(116)・標茶町(8)・弟子屈町(20)			
講師名	職名	講座名	
白川 欽哉	教授	農産物のグローバル化と世界史―工業のための農業から人のための農業へ―	
中川 訓範	准教授	インセンティブ	
宮崎 武俊	教授	クイズと試食で学ぶロシアの家庭料理	
生方 雅人	准教授	統計手法の活用―記述統計と推測統計―	
第26回公開講座【平成27年度(2015年度)】			共通テーマ：人と人の関係を考える
開催場所及び参加人数(合計)：大会会場(169)・浜中町(35)・釧路町(21)			
講師名	職名	講座名	
広垣 光紀	准教授	スーパーはなぜ98円の値札をつけるのか?―ショッピングの消費者心理―	
中村 隆文	准教授	不合理なのは悪いこと?	
岩澤 哲	教授	法律上の親子とは―裁判例から考える―	
皆月 昭則	教授	学問としての人間関係論の学び方・使い方	
第27回公開講座【平成28年度(2016年度)】			
開催場所及び参加人数(合計)：大会会場(193)・鶴居村(10)・阿寒地区(11)			
講師名	職名	講座名	
加藤 一郎	教授	キャリアについて語ることの意味―回顧と将来展望―	
金原いれいね	准教授	認知言語学入門―「文法」だけじゃないことばの研究―	
三輪 加奈	准教授	数値で学ぶ世界の貧困	
秋山 修一	教授	経済理論入門―経済学における費用とは―	
第28回公開講座【平成29年度(2017年度)】			共通テーマ：歴史と文化の地平を拓く
開催場所及び参加人数(合計)：大会会場(371)・厚岸町(31)・音別地区(12)			
講師名	職名	講座名	
萩原 充	教授	資源からみた日中関係史―鉄をめぐる争奪が日中戦争を招いた―	
高嶋 弘志	教授	箱館戦争と釧路・厚岸―榎本軍が道東にやってきた―	
藤田 祐	准教授	ロック・ミュージックとアイルランド近現代史	
神野 照敏	教授	都市を考える―歩くことから見えてきたこれからの都市のかたち―	
第29回公開講座【平成30年度(2018年度)】			
開催場所及び参加人数(合計)：大会会場(216)・標茶町(13)・白糠町(4)			
講師名	職名	講座名	
島 信夫	教授	第三者委員会委員会報告書から読み解くコーポレートガバナンス	
大澤 理沙	准教授	データで見る健康のための医療政策	
尾崎 泰文	教授	数の線上市り2進数	
田中 達也	准教授	教員の働き方について考える	
第30回公開講座【令和元年度(2019年度)】			共通テーマ：考える・歩く・動く～平成から令和への大学と地域～
開催場所及び参加人数(合計)：大会会場(434)・弟子屈町(17)・阿寒地区(12)			
講師名	職名	講座名	
北島 義和	准教授	遠く離れた、「優良事例」でもない、ほんの1つの地域から学ぶ	
小路 行彦	教授	北陸都市探訪	
高野 敏行	学長	哲学が与えてくれるもの	
東 裕三	准教授	住民および企業の地域間移動と地域活性化政策―経済学的観点からの考察―	

※注釈1 担当講師及び役職については、当時のものを掲載しております。
 2 平成19年度に教員の役職名を「助教」から「准教授」へと変更しております。
 3 阿寒町と音別町については、平成17年度以降、「阿寒地区」と「音別地区」と表記しております。

企画委員会事務担当・大利一則 工藤聖矢(釧路公立大学事務局総務課)



公開講座を振り返って

釧路公立大学教授
神野 照敏

私の研究テーマは制度学派と呼ばれる20世紀前半のアメリカの経済理論と当時の経済社会との関連を扱うことです。一方、学生の教育では、経済学の理論そのものではなく、理論が対象とする社会問題に目を向けるように指導しています。とくに本学の特徴からゼミ生には地域の課題に取り組むよう促してきました。公開講座は私にとってそうした理論研究と教育実践の結びつきを広く地域の皆さんに知ってもらい良い機会となっています。

私のアプローチは従来の経済理論で見過ごされてきた非市場領域に向けられています。経済成長とは商品ならざるものの商品化、非市場領域の市場化を促すものですが、そのことだけを追求すると社会に大きな歪みが生じます。過去2度の公開講座で扱った金融危機や都市衰退の問題も非市場領域の市場化、社会の過度な「私化」と不可分に結び付いています。今後も私化すべきでない「コモンズ(共有物)」を維持する道を模索していきたいです。



公開講座30周年に寄せて

釧路公立大学教授
金原いれいね

動物とヒトの違いの一つはことばを操る能力です。もちろんイルカやミツパチも音声や運動でコミュニケーションしますが、「今」「ここ」を離れて様々な事柄に思いを巡らせ他人と共有できるのはおそらくヒトだけでしょう。しかし、認知言語学では、言語能力について、ヒトがある時突如として獲得したと考える代わりに、複数の経験から共通項を抽出したり、連想によってものごとを結び付けたりする一般的な認知、思考能力と地続きであると考えます。一つ例をあげましょう。皆さんにもなじみのwillという語は、数百年前には欲求や意図を表す動詞でしたが、現在では未来時制を表す助動詞へと姿を変えています。「強く望めば希望は叶う」という、私たちのもしかすると楽観的ともいえそうな現実把握がこうした変化を方向づけたようです。



第27回公開講座(平成28年度)チラシ



公開講座を経験して

釧路公立大学准教授
北島 義和

私にとって、市民の方々に自分の研究を広くご紹介するという経験は、本講座が初めてでした。アイルランドという聞き慣れない地域の聞き慣れない話に興味を持ってもらえるのかとても不安でしたし、実際の講演もあまり出来のよいものではなかったと思います。しかし、市民の方々に頂いた質問や感想は、どれも真摯で、「知らないことを学びたい!」という意欲に満ち溢れたものでした。また、「(人前で話すことに)慣れ」といいですね」といった温かい励ましまで頂き、このような方々に支えられて本学があるのだなああと深く感じ入りました。私のような若手教員にとって、本講座は自分が何を背負ってここにいるのかを気づかせてくれる、貴重な場であると思います。



第30回公開講座(令和元年度)チラシ



公開講座の経験を通して

釧路公立大学准教授
大澤 理沙

公開講座を振り返って真っ先に思い浮かぶのは、とても緊張したことと参加者の方々が熱心に話を聴いてくださったことです。普段は学生向けに自分の専門である医療や介護を含む社会保障について授業をしていますが、市民の方々の前で話すのは初めてで、どのような反応があるのか想像もつきませんでした。しかし始まってみると、参加者の方々の真剣かつ温かい眼差しが伝わってきて、のびのびとお話することができたように感じています。またアンケートには、「説明がわかりやすかった」、「クイズが楽しかった」、「もっと聞きたい」等の感想を寄せていただき励みになりました。このような方々に本学が支えられていることを実感するとともに貴重な経験ができたことに心から感謝しています。



第29回公開講座(平成30年度)チラシ



釧路公立大学

Kushiro Public University of Economics

2020.12

発行者：釧路公立大学 企画委員会

〒085-8585 北海道釧路市芦野4丁目1番1号

TEL (0154) 37-3211